

未刊室町後期歌会資料―積文と略解題―(四)

武井和人
酒井茂幸

【緒言】

小論は、未刊のまま多く残されてゐる室町後期歌会資料（及びそれに関連するもの）を、広く学界に紹介することを意図としたものである。

今回の小論では、歴史民俗博物館蔵高松宮本の中から、以下の未刊歌会資料三点を選び、積文を示し、併せて略解題も付した。各歌会の本格的な考証は、今後の課題としたい。

① 石清水社百首続歌（H一六〇〇―二七七）

② 住吉社百首続歌（H一六〇〇―一三三七）

③ 点取和歌（H一六〇〇―三二一）

なほ、略解題末尾に当該歌会資料の積文・略解題の担当者を（ ）に入れて示した。ただし内容は、武井・酒井両名で相互に検討した。積文作成にあたり、以下の方針に従った。

(1) 漢字は常用漢字を除き、原本に近い字形を可能な限り採った。

(2) 丁移りを、「一・一」の如く示した。

(3) 鼈頭に小紙片が貼られてゐる歌は、当該歌の詞書末尾に◆を付して

示した。

(4) 底本の書誌は、各々の略解題を参照されたい。

小論は、

① 「校勘の方法に関する基礎的研究」

（平成二三〇二五年度・科学研究費補助金・挑戦的萌芽研究〔二三六五二〇五〇〕、研究代表者＝武井）

② 「中世後期歌会資料の総合的研究」

（平成二四年度・埼玉大学研究機構プロジェクト（研究費）＝一般
究②外部資金獲得促進研究〕、研究代表者＝武井）

③ 「室町後期歌会資料の総合的研究」

（平成二六年度・科学研究費補助金・基盤研究（C）〔二六三七〇
二〇〇〕、研究代表者＝武井）

による研究成果の一部を含む。

（武井和人）

1 石清水社百首続歌

〔国立歴史民俗博物館蔵高松宮本（H一六〇〇一二七七）〕

石清水百首歌 永享八年
八月十五日（外題〔打付書〕）

永享八年

石清水社百首續哥 八月十五日（瑞作題）

八月十五夜

かそへねと秋のなかよをこよひとは 空にしられて月そさやけき

御詠

望月

たくひなき秋の最中のそらそとや 名にあらはるゝもち月の影

不知夜月

槇の戸もさゝてしはしとまつほどに はや軒しろくいさよひの月

立待月

ゆふ暮は尾上の鹿もたちまちの 月やをそしと鳴ていつらむ

居待月 ◆

見てもそいとゝねられぬいたつらに ふけしるまちの夜半の月影

臥待月 ◆

いてぬより葉分につくすこゝろかな 軒はの竹のふしまちの月

廿日月

よひのまは聞へもいらてまちかねの 山のはつかに月そいさよふ

在曙月

した葉ちる月のかつらのいろみえて あき風ふきぬあり明のそら

三日月

雅世

宗継

實量

義運

公保 一

道一

やまの瑞にまたれぬかけをかこつまで いるかたはやくき焔の三日月

弓張月 ◆

やはた山てらすひかりもこれやこの 国をおさめしゆみはりの月

月前星 ◆

あまつ空ほしのひかりはほのかにて さやかにてらす秋の夜の月

月前風

雲はらふみねのあき風かひもなく おのか木間に月そかゝれる

月前雲

なにしおふ月のひかりにをのつから 雲もはれぬる秋のそらかな

月前霞

焔かせにたゝよふ雲をふきかけて かすみや月にいまもそふらむ

月前霧

ひさかたのあまつをとめやかこふらし 月をへたつる霧のまかきは

月前煙 ◆

もしほやくけふりにくもるあきのそら あまのしわさを月やうらみむ

月前時雨 ◆

秋さむみしくるゝ雲のたえまより さらにさやけき月のかけかな

月前露

さくはなの千種のつゆもかすみえて あきはいろ／＼の月そやとれる

月前霜 ◆

いとゝなをまさこも霜もしろたへに みえてそやとる夜半の月かけ

月前雪 ◆

名にたかき今夜の月にあらはれて うへなきふしの雪も見えつゝ

持康

持春

雅世

雅親

道一

持賢

資任 二

教親

持之

實勝

定親

實雅

山月

まぢかねし山のふもとをのこさめや ぶけくる月のひかりなるらん

熙貴

柚月◆

こゝろこそ月にはひかぬそま人も ねぬよしらるゝをのゝをとかな

雅親

嶺月

名にたかき月にそみゆるおとこ山 みねよりくたる袖のひかりも

雅世

谷月

山ふかみこの間もりくる月たにも まれにさしいる谷のしたいほ

公保「三

杜月

もみちせぬときはのりものこす多まで のこさすてらすあきの夜の月

貞國

林月

夕きりもきえのはやしをあきかせに このまをいつる月のさやけさ

義運

岡月

くすかつらくる人もなきをかへの さとゝふものはあきの夜の月

道一

関月

うらかせも夜さむの床の月かけに いとゝねさめやすまの関もり

實雅

野月

あき風のふきしく露にすむ月の ひかりそなひくをのゝしの原

定親

原月

たかさこやまつはらいつる月かけに 尾上くまなき秋の夜のそら

宗継

水月

いく秋もかきりはあらしいてしみつ 月もこゝにやかけをとむらん

満政

河月

すみわたるかた野ゝ原の月かけを こゝにもやとすあまの川なみ

實量

瀧月

音羽河たきつい はねにちるたまの かすもさやけき秋の夜の月

義雅

瀨月◆

をとたつる瀨とよりも猶あすか河 ふちにそ月の影そのとけき

瑞禪「四

瀬月◆

大井河はやせをくたすいかたしの とてもあらはにやとる月かな

持之

橋月

いまはゝやよわたる月もかけふけぬ あき風さむき竹河のはし

雅世

池月

水の面にそらもへたてすすむ月の かけやますたのいけのさゝ浪

實勝

江月

難波江やあしのなかはのあきゝぬと なみにやとかる月そさやけき

資任

沼月◆

をしほ山ゆふきりはらふまつかせも さえのゝぬまの月そくまなき

實雅

澤月

なみかゝる澤邊の草のたもとさへ われにしほと月やとふらむ

熙貴

浦月

かけきよくさそてらすらし焔も今夜 名たかのうらのなみのうへの月

義運

濱月

あきとむるうらのち舟のかすみえて 月もおしてのおほわたの濱

公保

瀉月

いつかまたみやこのつとにいはたかた しほひの月のあかぬなめを

雅世

磯月

ゆふやみのあまのいさり火影きえていそやまいつるあきのよの月

持康「五

崎月

からさきや松かけならてすむ月も またくひなき浪のかけかな

持賢

汀月

この河に生るとはなつうろくつも みきはよるの月そさやけき

義雅

湊月

みなと田もはやりすくいな葉には おちて雲なきあきの夜の月

持春

渡月

草も木も露のやとりやしけからむ さのゝわたりのあきの夜の月

宗継

泊月

ことうらもおなしそらく月かけの わきてあかしやとまりなるらん

道一

湖月

夜ふねこくにほのうらわにすむつきの こほりをくたくあきのあま

定親

ところからわきて最中の月のいろも 名にかふはなのみやこなりけり

公保

禁中月

萩の戸のあくるもしらすなれてみむ そてにいろそふ雲のうへの月

宗継

古寺月

やまのはに月そかゝれるかつらきや とよらのてらのあけかたのそら

持之

社頭月

にこりなき御代のしるしの今夜とて 月すみわたるいはし水かな

貞國「六

古郷月

たれか又ひとりすむ身とおもふらむ 月にしられぬふる里もなし

満政

水郷月

しほやかぬうらわの月のかけにさへ けふかそのこるしかのはま姿

雅世

山家月

ふくる夜の軒もるかけやちかゝらし 月もかたふく嶺のいほりに

實雅

草庵月

草の庵の軒はもりくるかけまでも 露をよすかにやとる月かな

雅親

田家月

おなしくは小田もるしつかいねかてを 月にともなへ焔のやまかつ

義運

閑居月

さひしさもあるはましはのいほりさす かた山かけにあり明の月

道一

月前萩

すむ月のかけもみたれてさくはなの した葉の露に焔風そふく

雅親

月前萩

夜もすから月にみかきてをく露の たまそちりかふおきのうは風

雅親

月前薄

いつよりかものおもふそてとなりぬらむ おはなかつゆに月のやとれる

雅世

月前女郎花

露ながら月にそなひくをみなへし かはらぬあきの契りしられて

瑞禅「七

月前蘭

月やとり露かはる野ゝふちはかま きてみぬ人はあらしとそ思ふ

實量

月前松

かけさむみ霜夜の月もしらとりの とはやま松に秋そふけゆく

公保

月前杵

もみちせぬ杵のいほりのしら露に あきのいろ見る月のかけかな

熙貴

月前檜

いつせ山ひはらにまじるあきのいろや この間をいつる月とみゆらむ

満政

月前柞

紅葉するはゝそのもりのしくるなよ こすゑの月のありあけのころ

持之

月前櫛 ◆

霜と見るかた野ゝ月のかけさえて はしの立枝をはらふあきかせ

定親

月前鷹

あまつ空月かけふるあき風に さそはれわたるはつかりの聲

實雅

月前鴨

月見ればさらてもあきのものおもふ なみたのかすやしきのはねかき

道一

月前鶉 ◆

露ふかき床は草葉とすむ月に あらそひかねてうつら鳴なり

雅世

月前鷄 ◆

あくかれて月にねぬ夜はをのつから またぬ八こゑの鳥やなくらん

持康 八

【略解題】

本書の書誌・概要に関しては、既に、『国立歴史民俗博物館資料目録「8-1」高松宮家伝来禁裏本目録「分類目録編」』（二〇〇九・三）に、以下のやうな記載がある。

石清水社百首統歌

永享八年。江戸中期写、外題靈元天皇宸筆。一

冊。〇二七七（ふ函一二）「装訂」袋綴。「法量」二七・二×二〇・

四。「表紙」薄香色地に水浅葱色の牡丹唐草文。「外題」石清水百首

歌八册八枚目（原・左・直・書）。「内題」石清水百首統歌八册八枚

目。「本文」半丁一〇丁。和歌一首二行書。歌題歌頭。「丁数」全一

〇丁。「別書名」（旧）石清水百首和歌 永享八年。（前掲書・一一

八頁下段）

なほ、龍頭にままた貼られる小紙片は、靈元院とその近臣が『新類題和

歌集』編纂に際して付したものと思はれる（酒井茂幸『禁裏本歌書の蔵

書史的研究』（思文閣出版、二〇〇九・一一）二五二頁、同『禁裏本と和

歌御会』（新典社研究叢書二五四）』（新典社、二〇一四・三）二〇三頁）。

従つて、前掲目録では本書の書写時期を「江戸中期」とするが、江戸初

期にまでひきあげても良いかと思はれる。

井上宗雄によれば、『中世歌壇史の研究 室町前期』一一九〜一二〇頁、

永享七年から嘉吉元年にかけて、義教の勧進と覚しき多くの法衆歌が、

石清水・北野・日吉・玉津島・新玉津島・松尾社等に奉納されてゐる。

本歌会も、その中の一つと位置付けることが出来る。管見の限りでは孤

本。

出詠歌人は、御製（後花園天皇）・道欽・義教・定親・雅世・公保・

義運・宗継・持賢・持之・雅親・持康・熙貴・貞国・実勝・満政・持春

・資任・実雅・教親・瑞禅・義雅。この出詠歌人は、同日に奉納された

『北野社法衆百首統歌』と同じである。（武井和人）

2 住吉社百首続歌

〔国立歴史民俗博物館蔵高松宮本（H一六〇〇一三三七）〕

永享七年十一廿一

百首續哥

住吉社法楽（打付書）

百首續哥（端作題）

早春

あまの原かすみわたりてのとかなる 雲みにしるき春の色かな

遠山霞

遠からぬ山こそなけれ夕かすみ 八重たつ雲の春のなかめに

子日友

としへぬる松も子日にあひぬへし 千世までなれん友にひかれて

春雪

あまの河春ゆく水のあは雪や おちても袖にきえんとすらん

紅梅

くれなゐのこそめの梅の花のえに きえあへぬ雪も色そうつろふ

餘寒嵐

なをさゆる嵐のすゑは雪けにて かすみもあへぬ春の空かな

草漸春

もえいつるほとよりもまつ霞して すゑのゝ草や緑なるらん

門柳

青柳の木高きかけを頼みてそ なりにし門の跡ものこれる

去鴈遥

はるくゝと霞をかけてかへるやま こえ行鴈の名にこそありけれ

春駒

道ひろき野にたちなつむ春駒や のとけき御代と猶いはふらし

春似雲

さきやらぬほとは花かとみし雲に いまはたまかふ山さくらかな

雨中花

さく花の衣春雨ふりそひぬ おほふ霞の袖のしづくに

夜思花

きゝすてゝぬこそねられね桜花 うつろふ比の夜半の嵐は

夕折花

しら波の名やたつた河暮はてゝ ぬしもゆるさぬ花を手折は

花似雪

富士とのみめつらしけなく三吉野や たかねの花の雪の明ほの

山路雉

さくらかり手にすへすともはし鷹の と山のきゝすふみやたてまし

春田

ひくも今神のみしめか住吉の 岸田の面の春のなはしろ

紫藤

十かへりの色をかけてやすみよしの 松におひそふふちなみの花

款冬

やまふぎの花咲比はあま人の 袖にほふらしまのゝ浦風

残春少

待わひつしたひつくしつ花ゆへに「三 春の日数そ今はすくなき

遅桜

持康

實量

雅世

實雅「二

御詠

宗継

雅世

公保

實勝

端禪

雅親

宗継

をそさくら青葉か下に埋れて 日かけにのこる雪かとそみる

宗継

卯花盛

咲にけり道もさりあへぬ卯花の 雪にもたどる小野の山さと

公保

待郭公

きゝてこそ心もはれめほとゝきす なくねをおしむ村雨のそら

雅世

聞郭公

したふへき行ゑやいつく郭公 雲間にとをきよその一聲

定親

夕早苗

すみよしの松の木陰もくるゝまで みとしろ小田に早苗とるなり

持康

荳菖蒲

舟よする淀のさは水ふかければ 葉末はかりをかるあやめかな

實雅

夜橘「四

かたしきのよはのたもとの匂ひをも 夢かとそ思ふ軒のたち花

雅親

梅雨

五月雨ははれ間そ見えぬ夏かりの あしやの軒もくちぬはかりに

實勝

河夏月

此ころは明行よはもやす川や やなもる月の影のみしかさ

雅世

里樽

それとなきしけみの梢うちかほり あふち花咲をかへの里

義運

水鶏

天の戸やたゝく水鶏の声のうちに 月かたふきてあくるしのゝめ

義運

浦蛩

すみよしやをのか光も玉もかる あさかの浦にとふ蛩かな

實量

晚立

さそひきてむら雲まとふ山風の 音よりはやく夕立の雨

實雅「五

山裏蟬

なくせみの葉山の木陰分ゆけは ぶりこぬ雨そ空にきこゆる

公保

泉忘夏

むすふ手にあつさも夏や忘井の わすれはてぬる袖のすゝしさ

御詠

立秋

めに見えぬ物からやかて身にそしる 秋たつ空の風のはけしさ

實雅

残暑

秋きても夏そわすれぬ涼しさを たよりとむすふ山の下水

実量

七夕別

むすひすてゝおきわたるらし天川 水かけくさの露の契りは

實量

萩風

あたりなる野もせの草の袂まで 露をそさそふおきの上風

持康

薄出穂

をく露に影うちなひき月も今「六 ほに出そむる花すゝき哉

實量

野蘭

色もかも移りにけりなふちはかま おなし野もせの草のたもとに

義運

鹿聲幽

またきけは山かせはかりのこりけり ねさめにとをきさをしかの聲

公保

暁蜚

草のはら霜さむからしきり／＼す 枕にすたくあかつきの聲

定親

月出山

わきて今あきらけき世のかゝみ山 影くもらて月やいつらん

實勝

瀧月

かけやまつとなせの滝におちぬらん ぶくる嵐の山のはの月

公保

古寺月

なかきよのやみにこそまで高野山 月にはつらきあかつきの空

御詠

田家月一七

みなと田やとまふくしつか軒をあらみ 衣手さむく月やとるらし

宗継

江月

あひにあふ神の心もすみのえに ひかりへたてぬ秋のよの月

實雅

禱衣

たれか今とをさとをのに住吉の 松かせちかくころもうつ覽

雅世

霧隔帆

志賀のうらやおきゆく舟のほのかにも はや見えわかす秋の夕霧

雅親

秋日

夕日影さすや外山の秋の色も あらし吹そふ木々のはつしも

義運

秋雨

しくるなり世にふる袖のいつとなく うき身を秋の露もなみたに

御詠

櫛紅葉

あやなくや錦たち枝の櫛もみち 木末をはらふ秋のあらしに

雅親一八

庭菊

しろたへの庭のまさこもひとつにて みかける露の玉のむら菊

雅世

秋欲暮

かくしつゝ秋やいなはの峯の雲 しくるゝ松に嵐ふくなり

定親

初冬雲

秋のゆく雲路とみえし夕時雨 けさもかはらて冬やきぬらむ

義運

河落葉

大井河夜半のあらしのはげしさを 水のあさけの落葉にそしる

御詠

枯野

野へみれば尾花くす花かれふして あきをのこさぬ霜の色かな

公保

寒蘆

こほりゐるみきはの波は音たえて あしのかれ葉に風そのこれる

實勝

井氷

ちりつもる木の葉もいくへこほるらむ」九 あらしのすゑの山の井の水

雅世

朝残鴈

このねぬるあさけの空にふる雪の みのしろ衣かりはきにけり

實量

霜夜月

さえあかす雲間の月の影おちて しもに色そふ庭のあさちふ

定親

潟千鳥

おのつから霜夜の月のあかしかた たつ空みえて千鳥なく也

雅親

渚千鳥

あさき瀬やまつこほるらむ川浪の たちゐもせはき渚のあし鳴

持康

行路雪

ふりつもる雪の中にもたま粹の みちをはこまの行にまかせて

遠郷雪

くれ竹のふしみやいつくをしなへて 山もととをき雪のあけほの

雅親

舟中雪」一〇

興津風まほにふきくるしら雪の つもりの浦によする友ふね 宗継

鷹狩 かり人のいるのゝきゝすかくれわひ をのかつかれをねにやたつらむ 實雅

埋火 さゆる夜をしらて心ののとけきや 春もとなりのねやのうつみ火 實量

春卜隣 くる春をたれまぢかねてあかすらむ たゝこよひこそ年のなこりを 義運

寄雲恋 行多なき乙女のすかたうはの空に おもふもくるし雲のかよひち 雅世

と煙ゝ なひかすはおもひもきえてうき日数 ましはのけふりなにとたつらむ 御詠

と露ゝ ことの葉にかけてみよかし露の身の をき所なきほともしらせむ 雅世「一一

と岡ゝ さてもなをあひむ事はかた岡の まつにこゝろをつくしはてめや 持康

と野ゝ いまははやをしへし中のはかなくも ちきりかれ野ゝもすの草くき 宗継

と原ゝ みたれゆくしのふか原のしのひつゝ かよふはかりのみちたにもなし 實雅

と菅ゝ けふこすはあすさへいかゝすかのねの なかき契にむすほゝるとも 雅親

と藻ゝ なひかすよあまのかるものみかくれて 人のちきりはよその浦波 雅親

と竹ゝ いつまでか袖になかるゝ河竹の なひかぬなみに思ひしつまむ 定親

と槇ゝ うき名のみたてるみ山のまきの露「一二 おほえすさてや色にいてけむ 定親

と蜘蛛ゝ さゝかにの糸にはあらてなみたのみ 衣にかゝる夕暮そうき 義運

と熊ゝ さらは又おもひもくちねあらくまの 身をうつほ木にすむはすむかは 實量

と鐘ゝ ひとりのみねよとの鐘の聲はして 待よひすくるほどそかなしき 雅世

と衣ゝ うきめかるあまの衣もかくはかり ほさぬたもとのたくひやはある 公保

と箏ゝ きかせはやたえす心も引箏の ねにたてゝのみあかしくらすを 御詠

暁夢 いたつらにぬる夜の夢をみそちあまり 八こゑの鳥やおとろかすらむ 公保

暮山嵐◆「一三 山のはにゆふある雲も音たてゝ まつのあらしや又しくるらむ 實勝

窓燈 まとにいる有明の月の影のうちに あらそふとなくのこるともし火 宗継

故郷 名にしおはゝむかしなからの山人も すむらんものをしかのふる里 雅世

河水清

大井河かめの尾山のかけなれば いく万代をかけてすまゝし

端禪

右百首以雅世卿筆之
一卷書寫校合了

渡雨◆

あはちかた雲の浪さへうかひきて せとこす舟に雨きほふなり

義運

鳴鶴

和かの浦に心かよはゝあしたつも ことの葉みかけ玉津嶋姫

御詠

磯浪◆

風をいたみあらし浪こすいそへには あまのゆきゝのあとそまれなる

定親「一四

山家鳥

柴のいほをむすふもちかき山鳥の 尾上へたてぬ友とこそなれ

雅親

杣河筏◆

をのつからなかるゝ影に杣川や 月をもくたす筏とそみる

實量

浦船

神もひけなきさの舟のつなて縄 いま玉ひろふ和哥のうらわに

雅世

遠村竹◆「一四

里とをきねくらの鳥のかへるさも みえてくれゆく竹の一むら

羈旅

いく夜までみはてぬ夢ののこるらむ むすひさためぬ草の枕に

實雅

神祇

いかはかり神もうくらむすみよしの 松にたむけのしけきことのは

寄松祝

住吉やけふ松か枝の手向くさ「一五 かりのこと葉も君をこそいのれ

御詠

永享七年十一月廿一日住吉社法楽

(以下空白)

(以下空白)「一六

【略解題】

まず、『国立歴史民俗博物館資料目録「八一―」高松宮家伝来禁裏本目録「分類目録編』』と『国立歴史民俗博物館資料目録「八一―」高松宮家伝来禁裏本目録「奥書刊記集成・解説編』』（二〇〇九）を参考にしつつ書誌を掲げる。

縦一五・三糎×横二一・五糎。袋綴一冊本。薄緑色七宝繫ぎに花菱の表紙左肩に打ち付け書（本文同筆）で「百首統哥（永享七年十一月廿一日住吉社法楽）」。内題（端作題）「百首統哥」。尾題「永享七年十一月廿一日住吉社法楽」。半丁一〇行。和歌一首二行書。詞書二字下がり。本文料紙楮紙。全一八丁。以下の書写奥書がある。

右百首以雅世卿筆之一卷書写校合了

元禄十三年弥生十九夜

底本では作者名が詞書の下にあるが、本稿では和歌の下に移した。

筆蹟・紙質などに鑑み元禄一三年の書写に相違あるまい。東山御文庫蔵『歌道目録』と高松宮本『歌書目録』に書目が見え、また一部の歌頭に藍色菱形の貼紙が存することから、霊元院仙洞に収蔵され『新類題和歌集』の編纂に活用されたと思われる。

本歌会資料の存在は夙に井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町前期』（風間書房、初版一九六一、改訂新版一九八四）に論及があり知られているところである。同著に拠ると、永享七年から嘉吉元年にかけて法楽和歌が夥しく伝存する由である。作者は以下のとおり。

後花園天皇・足利義持・実相院義運・飛鳥井雅世・三条西公保・正親町三条実雅・中山定親・松木宗継・北畠持康・滋野井実勝・瑞禅

・飛鳥井雅親・三条実量

永享後期の宮廷歌壇の常連ばかりである。なお、作者名の実名表記は続歌会の短冊に由来するが、単に短冊をつなげただけの草稿ではなく、歌題や作者名を底本の位置に移動した清書本からの転写であることが分かる。

（酒井茂幸）

③点取和歌

〔国立歴史民俗博物館蔵高松宮本（H一六〇〇一三二一）〕

道遥院点一ヶ度
点取和歌 称名院点一ヶ度
三光院点二ヶ度 (題簽)
続三十首和歌

海上霞

いせのうみやかすめる波にかつてふ みるめにあかぬ春の色かな

松間鶯

ふりにける子日の松のうくひすや その世の春をなをのこすらん

梅浮水

色も香もさなからうつすかけをたに おもひし物を梅のした水

静見花

夢とのみみはてぬ花にむかひみて さても此世の色香をそおもふ

暮春月

夕月夜ありあけまてはみしかけの 待出ぬ空に春そくれぬる

夕早苗

山かつのそとも小田のゆふすゝみ たよりしられてとるさなへ哉

菖蒲苗

里人はなしよとのにかりそへて あやしく夜やこも枕せむ

水邊蛭

なつむしの光也けりたく火やは 水にみるとも涼しかるへき

嶺夕立 ◆

こえてくるほともこそあれいく重とか かさなるみねの夕立の雲

六月祓

みそき川みよや瀬をせくあさのはの なかれぬ月のかけもとまらず

薄似袖

音たてゝ尾はな袖もなるこひく よそめは風のもる田面かな

暁初雁 一

此ころのねさめはなれしまくらにも なみたやさらに初かりのこゑ

深夜月

あちきなく思入ては月もみし あまりなみたの袖に夜ふかき

搦衣幽

いかゝすむ身のならばしそふたりとも うたぬきぬたの山ふかきこゑ

秋时雨

山かけはけに雲きりの雫もや また秋風に打しくるらむ

落葉風

みたれちる木のはにふかき風の色は むなしきものゝいかにみてまし

寒草霜

／＼さしつめて霜後朽なむとは貞節の心申かたく候やらん、詞のつゝき
思たく存候

枯はつる草葉をみても霜のゝち 枯枯なむ松やあはれ知らむ

篠上霰

ひろふへきほともあらしのさゝのはに 心をたく玉あられかな

河千鳥

〈明石の入道か諫の詞をかしくきこえ候、／＼但千鳥にとりてはすこし
心の誹諧のやうに存候如何〉

妻恋もいたつらならはみなど川 海に入ねと千鳥なくらし

姉小路宰相

歳暮雪

はかなくもくるゝ年かな山ふかみ きえてもあと雪の下水 冷泉宰相

不逢恋

つれなさのかきりを人にいつまてと しらぬ命にたのみてかまつ 姉小路宰相

第二句四句に文字は耳にたゝぬもおほく候、これは世に命のと候て／よろしくや如何

久祈恋

神よいかにゆきあひのまの霜をへて いのるしるしのまつにつれなき

稀逢恋

まつほとは千夜に一夜となけゝとも おもへはなかきたもとはなし

恨偽恋二

たかならぬ世のことはりにいさめはや あまりこと葉の末もとをらぬ 姉小路宰相

被忘恋

しらす身をなき世になしてとはさらは なからへけりといふよしもかな 御製

山家雲

谷の戸はいつくのみねもちかければ 軒はに雲のはるゝまもなし

古寺水

たよりあれや夏をもこゝに結井の 水は榎のはのかけそ涼しき 姉小路宰相

旅宿雨

けふこえし山路の末にみし雲の ひとよすくさす雨となりぬる

暁懐旧

みるか中はなき世をしたふ人ならて さめてそ夢はあはれなりける

暁の心幽候歎、但さも候へき事候やらん

社頭松

祈をきし君か千とせはみつかきの 昔へたてぬ松も知らん 姉小路宰相

僻案愚点十二首／実隆上

御製 六首

冷泉宰相 一首

姉小路宰相 五首

本云

已上以 勅筆御本所奉写之、如此御詠始終次第云々

永正第九四月日

本 濟継卿詠草云四月日 内より十首の題をたもふ勅題云々

本 私云永正九（壬／申）也 濟継卿詠之分／彼以自筆之詠草一校了」三

鶯

来る春を千里につけて鶯の なくなるけさの声ののとけさ 中山大納言

柳

さく花のにしきもまたてあさな／ かついろそむる青柳のいと 広橋大納言

桜

山たかみ花のさかりとみよしのゝ 雲よりうへにほふ春風 親王御方

蛙

晴にける雨のなこりもあさ沢の 水のかはつのこゑ／になく 万殊院宮

藤

いけ水の水草もはらふはるかせに 梢の藤も波やさはかむ 御製

荻

風ふけはなひかぬもなき草の葉を わきて秋しる荻の声哉 四辻大納言

蘭

あき風に先ほころふるふちはかまぬしやいかなるさてもみなくに 按察大納言

月

水の面のくもらぬまゝにかつら川 月をすませるなにやなかれむ 廣橋大納言「四

山風嵐

あきの色はいまはた荻に吹たえて のき葉にちかきあらしをそ聞 万殊院宮

葦◆

花に咲野へのにしきのおもはへて をのかとやおもふなく蟀 御製

雲

故郷のおもかけのこせ越きつる みやこの山はあとのしら雲 親王御方

星

あかつきの星をいたゞきおきいてゞ つかふる人そきくにかしこき 中山大納言

石

滝波のかゝれるいしはしら絹の たかつゝむとそあやまたれぬる 按察使中納言

野

もえいてし千種はしものをくまでも めかれぬ色や此野なるらん

関

わかれ路のとりかねならばたひころも なにあふ坂の関になくらむ 曼殊院宮

松

わかぬ浦やいくとし経ても散うせぬ 例そしるぎ雲のことの葉 中山大納言「五

榊◆

神や知いのるねかひもみてくらを かけしや心にしけるさかき葉 御製

槿◆

ひかりあれやかりのみあれのあふひ草 月のかつらにかけそへてみむ 親王御方

旅

歸らむはたのましなからたのめてや 草の枕のよをはかさねし 四辻大納言

祝

まもれ猶今年内外の宮柱 太敷たてし世にかへるなり 廣橋大納言

僻墨六首／仍覚

御製 一首

親王御方 二首

曼殊院宮 一首

四辻大納言 一首

廣橋大納言 一首

以雅朝卿本書写之／同夜同刻」六

(半丁分空白)

三條大納言点 天正六年十月八日 五十首

朝霞

ふかき夜のかすみなからの雲井より 先あけそむる春の色哉 御製

あさまたきうつるもわかぬ日かけにや ふかきかすみの色をみすらん 親王御方

紅のこそめの色に朝日かけ にほへる山やかすみたつらん 左衛門督

風もなくのとけき春をつまこめて 今朝たつ空の八重かすみ哉 親綱

海こしの山のはわかすかすむ日の ひかりそうかふ浪のあさなき 源三位「七

山桜

よそめにはみ雪の色にとられても 花のかふかき春の山かせ 源三位「七

しるしらす猶わけいらむ夕はやま 花の香ふかき春の山かせ

しら雲もふもとにかほる春風に 花はうへなきみよしの山 御製

色も香も花咲むすへひむろ山 さくらにふるはるの山かせ
松杣を所々に雲間にて 色にあらはす山桜哉

郭公 心の松にて待ノ字きこえ候へは重ノ語如何候

あくかる心の松にやとるらん 待につれなき山ほととぎす

左衛門督

ほととぎす一夜の軒のつまとなる あやめにちきる声そかひなき
物そおもふた一聲は夕くれの 雲のはたての山郭公

郭公いく夜かなれておもひねの 夢路なからの一声の空

さたかなる夢さへたとるほととぎす しのひねなりし心ならひに

親王御方

萩露

枝しけみおちても萩の外ならぬ 八 露のしからみ花にかけり

源三位

咲萩の花すりころも染もあへす 心にうつるみやきの露

御製

咲萩の花にふれにし下露は おちても水の色香とそなる

親王御方

玉となをみかきやそへん萩の戸に 待えし花の枝の朝つゆ
萩ノ下露の落て水の色になるへき事如何

きてかへる錦ならまし夕露に かくれる袖は萩か花すり

夜鹿へぬ繩ノ事專ヲ申シ、只ぬなはにて候を寝ノ字ヲくはへ用候、是ハ水

底の草にて鹿ニハその縁なく候哉、海辺ノ鹿とノ題にさへ出候うへは難

申へきにあらす候へとも、題にむかひてはいかやうの事も詠する常ノ事

にて候、夜鹿トいふはかりにノよりて專ノさは木ニよみてノ魚ヲ求

むる類也

さをしかのつまとはつゐにぬぬ繩の なかき夜すから恨てそなく

なきあかす夜のおもひのありとたに つまはしらすやさをしかの聲

いたつらにかたふくまでの月にたに 枕かわさぬしかやなくらん

さひしさをたへてきけとやもるいほの 田面の月にをしかなくらん
山風にいつくを鹿のたちととも さためぬこや夢さそふらん 御製

時雨

吹をくるあらしの末のうき雲の ふりもつゝかぬ村時雨哉

をくれつる雲のありてや一とをり 九 はるゝ跡にも又時雨らん

親綱

うすくこく染つくしてもさらに又 しくれてめくる山のはの雲

雲はこふ空のみとりもかはらねは 松のしくれの色とやハみん 親王御方

松をと候へハ慈鎮和尚を本哥ニ用候ニ相似不

可然候

緑には霜もをかしとふりつくす 松と竹との村時雨哉

源三位

忍恋

かならずと契りしまゝの夕たに つゝむ人めにせくなみた哉

親王御方

おもふそようき名はいつの世かたりも 人しれぬ身になしはつるまで

御製

みるめたになみの底ともよせやらて よそにはしのふうらめしき身や

つゝめ猶たれよりをきて世語に かりもいてん水くきのあと 源三位

消かへるなみたの露に袖はよし ぐちはつとも色にいてめや

忍恋 (生類とはかり申すてかたく、かやうの所は必刺字ヲ賞し候)

きしにおふる草の名をさていつよりか 人の心の色にみすらん

たえは人の心のあらましも かはるまことに今そおとろく 源三位

たのみこしわれそはななきわすれしは 一〇 わすれんとてのかねことの末親王御方

とりかゆるたねにしもかなわすれんと 人のまくよりわかおもひ草

ことの葉の末もとをらて忘草 なにをしふのみたれそふらん

御製

羈旅 (日に三度省身ハ古語ニて候へとも、／うき旅のならひ千たひもかへり
みはあるへく候)

日に三度たひのうきにそかへりみる わかみへたてゝこしかたの空
とひよらむやとりハきりの立こめて 夕風さむし衣かせ山 下句同類

けふも又いつくの道にくらしてか おもわぬ草の枕からまし

故里にかよふたよりはそれながら 夢路かさなる枕わひしき

たひ衣かりねの宿のなこりにも まつ思はるゝ故郷のそら

山家

立ましる草木のみかは山かつの しらぬこと葉もすむたよりなる

柴人のかつさしられてたてそふる 煙もさひし山の下かけ

深山路は雪になるらし名もしらぬ 鳥の声きく谷のかくれ家

しつかなる塵の外なる山住に」一一 猶世のうさやおもひしるらん

うき世にはかへらし物とあつき弓 猶ひきこむる山のしたいほ

御製八首 親王御方 六首 左衛門督 二首 源三位 七首

御製八首

親王御方 六首

左衛門督 二首

源三位 七首

親綱 三首

(二行分空白)

三條大納言點 (天正五年／三月十八日) 卅首

遥尋花

こえつゝすかきりハ花の木かけそと けふもかすみの山路くらしつ

藤中納言

花に越し山はいく重としらねとも かへらむ道にかねてはるけさ
ことさらに春にはたれも尋ねみん 花のとこ世の夢の通ひち

当世ハ花なきさとゝこそ申を、花に賞せむ事はいかゝ候へき

けふいくか花やいつくと分まよふ われにをしへよ春の山もり

咲方の梢を山のかきりにて いく重の嶺か花にこえけん

尋ね入心ちの末にかほりきて 花ある方そ風にしらるゝ

(一行分空白)

分しより又分いりてみよしのや おくまで花にいつかきにけん

暮ぬとも花にかかるへきやとりとや 猶わけすてぬ山路なるらん

はるかに尋ぬるといふ題の心は自身なるへきをとやとうたかひけるは人のうへを

察しけるにや、おほつかなし

あくかるゝ心のゆくゑ分入て 花にはふかきおく山もなし

分まよふ花のしら雲けふもまた よそめはかりにゆく山路かな

咲ぬやと花に心をつくはねの みねよりみねをけふハこえぬる

静見花 中山宰相中将

みるかうちの花は更にものとけさを たか世の春の色にさくらん

かつちるをかそふるはかりみるか中に 木の間そふへき花そあやなき

とふ人もなき山里の花の色を ひとり心にまかせてそみる

羽風さへ猶心して蝶とりも 長閑に花のかけになれぬる

けふこそは風も音せぬ花さかり みる心さへちらぬ斗に」一一

心さへ春にのとけき大内や 山かせしらぬ花のさかりハ

雨すくるよみの木の間をもるかけの 月にかすみて花そ咲そふ

つく／＼と心にしめてめかれせぬ 花の木かけや春のかくれ家

左衛門督

あひに逢てけふこそ春ののどけさも わか心をも花にみえけれ
はらひあへぬうき世の塵もをつから むかへは花にのこるともなし
かけとめし花に心のうちとけて いつをあく期のかへさ木はせむ

中山宰相中将 二首

中院宰相中将 二首

新三位 三首

雅朝朝臣 一首〔一五

誠仁 二首

終日書写之

本／元和七／于時六月廿日 羽林源

(以下空白) 一六

寄花恋

もにて山はと候へは、世間の花はうつろはぬやうにきこえ候か

たくへつゝみるたにつらきよしのなる いもせの山ハ花も兼そうつろふ 中院宰相中将

おもかけのなこり夜ふかく花そめの 袖のかをしき衣／＼の空 左衛門督

うつろふをかねてそおもふとけそめし 人の心の花の下ひも 新三位

うつろふも花をかことの契りゆへ ちるよの外のうさやそハマシ

あたるも人によるてふ花こゝろ われにはつらき色をみすらん

よそにちる人の心の花もけに 一四 うつろふ色はみるもかひなし 御製

あかさし枕かそへてふたしへの 別かなしき花のおもかけ 持明院中納言

おなし世の哀はかけよいとはるゝ み山さくとも春の外かは

うつろはむ色とみる／＼花にのみ そめし心の人に悔しき 四辻中納言

それとみて心にかゝる花よりも 人やたかまのみねの白雲

うき人にみせはやみはやさそひゆく 風には花の心よはさを 誠仁

夢中之一班十九首／実枝上

御製 二首 一校畢

持明院中納言 一首

藤中納言 一首

四辻中納言 三首

左衛門督 二首

【略解題】

三条西実隆・公条・実枝の三代の合点・批評が付された歌会詠が合綴される。各歌会是一部他本に見出されるが、組み合わせは本資料独自のものである。

まず、『国立歴史民俗博物館資料目録「八一―」高松宮家伝来禁裏本目録「分類目録編」』『国立歴史民俗博物館資料目録「八一―」高松宮家伝来禁裏本目録「奥書識語集成・解説編」(二〇〇九)』を参考にしつつ書誌を掲げる。

縦二七・四糎×横二〇・〇糎。仮綴一冊本。本文共紙の表紙左肩に外題(題簽、靈元天皇宸筆とされる)「点取和歌(逍遙院点一ヶ度/称名院点一ヶ度/三光院点二ヶ度)」。内題なし。

端作題Ⅰ「続三十首和歌」

Ⅱ「三条大納言点 天正六年十月八日 五十首」

Ⅲ「三条大納言点(天正五年/三月十八日)卅首」

半丁一二行。和歌一首二行書、Ⅰのみ一行書。合点と細字評語書入れがある。全一六丁。本文料紙楮紙。以下の四度の続歌を収める。

① 続三十首和歌(永正九年、実隆点〔端作題Ⅰが該当〕)

② 続二十首和歌(公条点〔端作題ナシ〕)

③ 続五十首和歌(天正六年十月八日、実枝点〔端作題Ⅱが該当〕)

④ 続三十首和歌(天正五年三月十八日、実枝点〔端作題Ⅲが該当〕)

奥書は、①に「本云/已上以 勅筆御本所奉写之、如此御詠始終次第云々/永正第九月四日/本/濟繼郷詠草云四月日内より十首の題をたまふ勅題云々/本/私云永正九(壬/申)也/濟繼詠之分/彼以自筆之詠草一

校了」、②に「以雅朝卿本書写之/同夜同刻」、④に「終日書写之/本/元和七/于時六月廿日羽林源」^(北畠親朝)とそれぞれある。

井上宗雄『中世歌壇史の研究 室町後期』(明治書院、初版一九七二、改訂新版一九九一)によると、③は、宮内庁書陵部蔵『和歌部類(自永正十年/至天正六年)』(一五〇―六五一)や早稲田大学図書館蔵井上宗雄旧蔵『五十首続哥』(一四一―一七三)などに収載され、④は同『和歌部類』などに収められる。

①は典拠を未だ見出せていないが、『柏玉集』・『参議濟繼集』・『邦輔親王集』・『基綱卿詠集懷集之外』に他出が存する。②の出典・他出は未詳である。

(酒井茂幸)